第20回日本赤十字看護学会学術集会

特　別　対　談

徳永進氏×谷川俊太郎氏

Susumu Tokunaga×Shuntaro Tanikawa

対談者　徳永　　進　Susumu Tokunaga　（野の花診療所）
　　谷川俊太郎　Shuntaro Tanikawa　（詩人）
司　会　川嶋みどり　Midori Kawashima　（日本赤十字看護大学，健和会臨床看護学研究所）

川嶋　徳永先生，お話をありがとうございました．「特別講演1ケアの地下水」に引き続いて，この余韻を持ったまま谷川先生にご登壇いただいて，おふたりでのお話を始めて頂きます．

徳永　今日はね，死のことではなく生きることを話してほしいと言われたんですけれども，俊太郎さんはだいたい朝何時に起きるの？

谷川　6時半ぐらいですかね．

徳永　もう日が昇っていますよね，今ごろ．

谷川　でしょうね，明るいね．

徳永　ええ．でしょうねって何ですか(笑)．

谷川　だって特別に天文学が僕は得意じゃないから……．日が昇っているかどうか分かんないもん．

徳永　で，寝られるときは何時ごろ寝られるんですか．

谷川　12時半ぐらいかな．

徳永　あ，そこは一緒．

谷川　あ，そうですか．12時半まで何しているんですか．

徳永　寝床でね，あさって東京に行くのに何にも準備してないし．俊太郎さんの詩のどれがいいかなと考えてたんです(笑)．

谷川　やっぱりすごい愛想がいいね．

徳永　愛想がいい．その前に聞くことまだあるのよ．まだ．

谷川　はい．

徳永　食べるのが，1日1食っておっしゃってた．今はどうなっています？

谷川　今でもそうなんだけど，1日1食じゃだめだと言う人がいるんですよ．何か基本，肉や何かは食わなきゃだめだと言われて今は戸惑ってるわけだよ，どっちにしようかと思って．俺は1日1食で十分なんだけど．

徳永　戸惑ってる．さっき私（講演で）話しましたよね．

谷川　そう．それを今……

徳永　聞いたわけですね．

谷川　聞いている．……

徳永　あと入浴問題ですけど，入浴はどのように．あの，風呂に入らなくてもいい人でしたっけ．

谷川　まあ．

徳永　2カ月？

谷川　3年ぐらいはいいと思います(笑)．でも3年はないですけど．ほら，山の中で修行をする人はもう大変ですよ．空海なんてすごい修行したときには，ああいう人たちはお風呂入ってないでしょう．

徳永　そうでしょう．

谷川　ねえ．

徳永　水はどっかでかぶったんじゃないのかな．

谷川　うん．だから水かぶるぐらい，シャワー浴びるぐらいはするけども，何かみんなすごく風呂に入りたがって，皮膚もどんどん減らしているわけでしょう．

徳永　もちろん．

谷川　体に悪いんじゃないかと思うんだけど．

徳永　本当？　それはあとでみどり先生に聞きますけど，そういう話をされると困っちゃうんですけ

どね.

谷川　え，どうして？　銭湯の人がいるわけ？

徳永　あの，ケア．看護師さんたち大きな仕事の一つは入浴介助.

谷川　そうです．そこがよく分かんないの，何で入浴しなきゃいけないのという.

徳永　患者さんの多くは気持ちいいと言うんですよ.

谷川　じゃあ，快楽ね，清潔じゃなくて.

徳永　あ，清潔ですよ，もちろん清潔．陰部なんてすごく汚れるんですよ.

谷川　そりゃそうですよ．日々ウオッシュレットだからね，そっちは大丈夫ですよ(笑).

徳永　そっち，はい．ウオッシュレットと言えば，ある日，もう這うしかできないがんの末期のおばあちゃんがムカムカして，這って水洗トイレまでいき，ふと間違ってウオッシュレットのボタンを押した．すると水が飛び出て来て，おうおうとなった．それでうがいをされ，口の中がきれいになった(笑).

谷川　おう，いい話ですね.

徳永　話がそれましたね，元に戻りましょう．看護って何でしょうね，看護.

谷川　え，看護？

徳永　看護.

谷川　看護，介護どっち.

徳永　うーんと，それはどう違うの？

谷川　看護は，だって病気を看護するんでしょう.

徳永　う，うーん.

谷川　介護は俺なんかも介護をされてるから，普通の人でも介護をできるんですよ，年取れば．あるいは何かそういう……

徳永　病院でするのが看護で，家でするのが介護みたいな.

谷川　とも言えないんじゃないですかね.

徳永　自分で言っておいて，とも言えない(笑)．その，まだまだ本格的に入院はなさったことがないようですけど，看護師さんについてとか看護についてはもうこれも専門じゃないから興味がない？

谷川　いいえ，もうすごい差し迫った問題ですね．私はひとりで今，独居老人しているわけでしょう.

徳永　だいたい独居老人はひとりなんですけどね(笑).

谷川　それで，やっぱり周りが心配するのね，俺は足元が危なくなってるし，息子とか，うちで何か事務を手伝ってる人たちとかが．だから，やっぱりこれからは他人に頼らなければいけないっていうのを私は覚えたんですよ.

徳永　そういうことってやっぱりあるんですかね．ひとりでずっと最後まで独居で死んでいくということは無理？

谷川　無理ですよ，そんなの.

徳永　それじゃあ，その詩をお願いします.

谷川　え，どの詩？

徳永　そこに，ここにある．ちらっと見えたもん.

谷川　私なんかね，80歳を過ぎたらね，何か人生を見切るようになっちゃったんですよ．見限るんじゃないのよ，見切るの.

徳永　見限ると見切ると違うわけね.

谷川　見切るは，だってよく商店であるじゃない，何かこれは見切り品とかっていってさ(笑)．だけど，見限るというのはちょっともう離れちゃうわけでしょう．見切るはね，やっぱり売る方なのかな，逆に覚悟してやっているわけでしょう．だから，ちょっと違うんです．じゃあ，『見切る』ね.

この人間社会を見切ったと
そう君に言いたいと思ったのは本当だ
見限ったのではない　見切ったのだ
君をではない　自分をでもない　人間社会をだ
偉そうに聞こえるだろうか　傲慢だろうか
見切ったところから始めようと思うのは

君が思い描く未来を否定するつもりはないが
言葉で描いたものを実現させるには
抽象から具体への　観念から事実への
気が遠くなるような難路を歩まねばならない
どこでその一歩を踏み出せるのか
言葉を置き去りにしてどんな行動を選ぶか

代わり映えしない日常の暮らしの中で
未来に目標を立てるのはいい気晴らしになる
世界がぜんたい幸福にならないうちは云々と
賢治は書いたが
世界全体なんてものは言葉の上にしか存在しない
「あり得ない個人の幸福」は世界の不幸の只中で
君のちっぽけなココロのうちで生まれるんじゃないか

(拍手)

谷川　じゃあ，また話に戻る前に詩を読んじゃうね．『無知』ね.

私の知らないことに
私は支配されている
私が何を知らないのか
それすら私は知らない

見えない壁がある

何世紀にもわたって
人間が築いてきた壁
真実と虚偽を積み上げて

その壁を越えさえすれば
自由になれる
と　私は考えているが
その先にいったい何があるのか

そこで私は何を知るのか
言語を通さずに知る何か
嘘と本当の区別のない何か
無知の未知の地平？

知らないことで
守ってきたものを
知ることで失う
ヒトの知はもろい

（拍手）

谷川　ちょっとびっくりするでしょう？
徳永　あの，この間さ，ブラックホールを写真で何か見せたようなニュースがあった．
谷川　はい，はい．
徳永　あれを見られて，どう思われたんですか．ブラックホールはここか，みたいな感じだった？
谷川　いや，あの写真は写真とは言えないんじゃないかと思って，要するに理論的なものを映像化しただけなわけでしょう．実際に映ってたとは思えないんですよね．で，ブラックホールなんかはすごいやっぱり何か興味があるんですよね．どうなるんだろうと思って．
だから，だいたいブラックホールの何か本質に近づいていく天文学というのはすごいもんだなと思っていますけど，でも人間があそこまで考えるのは，やっぱり傲慢じゃないかと思うね．人間の頭脳って，ほら，限界があるんですよ．この大きさの中に入っているわけでしょう，脳は．だから，どうしても大きさ的にさ，そんなに無限のことは考えられないと思うんですよね．でも，みんな無限とか永遠とかを考えてるじゃん．
徳永　無限とか永遠って，俊太郎さんが先に言いだしたんじゃなかったっけ．
谷川　そう．私は言葉を使う人間だから使っちゃいますよ，言葉を．でも，無限や永遠が分かってるとか知ってるとかは言いませんよ．だめ？
徳永　いやいや，いいんですけど．で，ブラックホールのことは，今回のことのずいぶん前から俊太郎さんの中には，何か特別なもの，特別な言葉としてあった．あれは何でだったんですか，今の詩みたいなものが通じる何かがあったような気がしたんだけど．
谷川　それもありますね．自分では決して知ることができない，経験することができない何かがある．でも，その観念としてもね，何かすべてを吸い込んでしまうものがあるというのは，すごいなと思うんですよね．で，自分が吸い込まれたときにどういう感じがするんだろうと思うんだけど，そんなことは到底できないしね．だから本当に，抽象的な観念としてしかブラックホールはとらえられないんだけど，そういうところを観念としてとらえようとしてる人間が面白いとは言えるんですよね．

徳永　ケアって何ですかね．
谷川　ケア？　さっき（講演で）何か，ケアと何だっけ．
徳永　背と手．
谷川　背と手．ちょっとそれだけでは足りないかもしれない．ケアって要するに，自分の体を使うことだというふうに思うんですけどね．だから，何かそこまで一般化するとよくないんだけど，その相手のことをどこまで認めるか，どこまで受け入れるか，できれば愛し得るか．
徳永　愛する？
谷川　うん．
徳永　そいつは難しい．
谷川　そう．たぶん無理だけど，でも理想としてね，こんな嫌なやつをケアしているんだけど，俺はこいつを愛せるだろうかという疑問は持った方がいいという気はしますね……
徳永　へえー．
谷川　せめてケアをしなくてもね．すると付き合っている間にね，よくあるんですね，そういうの．もしこいつを愛せるんだったら，どうすればいいんだろうみたいなことね．
徳永　俊太郎さんが言う愛するは，どんな感じの愛ですか，もちろん恋人の愛ではないんだけれども．
谷川　愛って本当に何か広く深い世界だから具体的に何かを考えないとね．まあ，すぐ一般化して何かいい言葉になっちゃうんですよね．だけど，何かケアをするときの相手に対する感情というのは，すごいデリケートで何かもう繊細で複雑怪奇なんじゃないかというふうに思うのね．だから，その人との付き合いの長さというものも問題なんじゃないでしょうかね．
家庭でね，そのケアということになると，お父

さん，お母さんたちともう何十年も付き合っておられるじゃない．そのときに本当にケアというのもが，何か具体的に分かると言えばいいのかな．だから，病院での職務的なケアというのは，それが一種の理想と言えばいいか，そういうイメージがあった方がいいというふうに思うんですね．

徳永　どこまで愛せるかということを，イメージとして持とう．

谷川　だから，愛という言葉を使わなくてもいいんですよ，僕は使っちゃったけど．何か思いやりとか，そういういろいろなこともあるんじゃないですか．

徳永　思いやりなんですって．で，そうそう，私たちには何かいろいろあるんです．患者さんや家族とうまくいけたなとかうまくいけなかったなとか，いろいろあるわけですよ．そこで私が思ったのは，うまくいったなという経験を集めてみるとですね，その一つに，気合があるんですね．

谷川　気合．

徳永　気合．この患者さんほっておけないみたいなことを，看護師さんが思うかどうか．で，そこで思えなかったら，結構やっぱりランクが落ちるんですよ．あともう1つはですね，私もそうですけど，その部屋に何回行ったかという接触点数と自分で呼んでいるんですけど，朝行ったからもういいじゃんでなしに，夕方もう一遍「いかがですか？」と行ってみる．そうして増加した接触点数は気合というか思いやりの深みですね．それを掛けるとひとつの数値が出きて，それがうまくいけた症例かどうかという判断となる数式を，おととい思いついたんです．

谷川　そこにスキンシップは入ってないんですか（笑）．

徳永　その思いやりのところの，そこのスキンシップですよね．

谷川　思いやりでも何でもいいんだけど，とにかくスキンシップがあるかないか，それが薄いか濃いかというのはすごい大きな問題だと思うんですね．

徳永　スキンシップって何？

谷川　抱きしめてやるんですよ．何日間かあるいは何時間か付き合っている間に，患者さんをハグできるというのがすごく大事なことだと思うよ．

徳永　もちろん人の場合はね，握手をして，じゃあ，また来ますというと握手でもそれなりのスキンシップなんですよ．

谷川　そうなんだね．

徳永　頑張ろうねと肩をたたいたり，別にハグにすぐ走ることはなくて．看護師さんたちのいいのはね，肌に触れるんですよね．

谷川　そうだよね．

徳永　体をふきましょうねとか，そこはもうほっといても肌に触る．

谷川　でも，それ，ほら，医者，看護師として触るのと，ひとりの全然そういう役割のない人間として触るのじゃ全然違うじゃん．だから役割として触られてもさ，何かあんまりうれしくないんじゃないかと思うよ．

徳永　今の時代は，感染予防はちゃんとしていますかと，事故はないようにしていますかと，そういうことを看護師さんは求められるので，谷川さんが言うようなことをやっている時間も気持ちもないと，みんなロボットのように働くことになるんですよ．

谷川　そうなっちゃっているの？

徳永　ではないかと，後で詳しくみどり先生に聞いてみようと思っているんですけど．

川嶋　割り込みたい，いいですか．

徳永　はい．

川嶋　いや，おふたりのお話を伺っていて本当にそうだなと思ったんですけども，確かに愛を抜きにはケアは成り立たない．でも，いくら，薄味といっても恋人同士のそれでは困るわけですよ．それからあんまり感情移入しちゃっても困るわけですよね．だから，先ほど，お父さんとかお母さんとか家族が一番のモデルのようにおっしゃったんだけども，実は肉親のケアってとっても難しいんですね．ちょっと一線を画してというか，第三者の私たち看護師がするケアは肉親じゃないケアができるんですよ．肉親はやっぱりのめり込んじゃって，ケアにならないことがある．

谷川　僕が言っているのは肉親のケアのようにということじゃなくて，肉親との関係性の中にあるスキンシップという意味で言ったんですよ．あるいはけんかをしたって，スキンシップをやっているような親子もいるかもしれないけど，何かしらのつながりがもたらすスキンシップってのがあると思うんですよね，それを否定するにしろ肯定するにしろ．だから，そういう深みにね．否定的だろうが肯定的だろうが，何かそれを想像することが患者とそのケアをしている人の間にも，あり得るんじゃないかっていうような気がしているわけなんですけどね．

川嶋　そうですね．それで，私はもう1つね，徳永先生は数式とおっしゃったけども，やっぱりケアって時間とすごく関係してると思うんです

ね.

谷川　そうですね.

川嶋　時間の長さじゃなくて，その人に3分間でも2分間でも集中する時間というのは，とっても大事だと思います．今，心ここにあらずで，ほかのことをしながらこの人のことを考えると，全然心がこもってない，愛がこもってないケアになっちゃっうわけ，形はケアかもしれないけど．やっぱり私たちがそばにいて聴いて触れて，そして話すということを同時にいろいろ混ぜこぜにしながらやっているわけなんですけども，そのそばにいる居方にしてもただそこに物理的にいてもいることにならないわけですよね．その人のために今ここにいるという，それが大事じゃないかなと思うんです．それらのトータルがやっぱりケアじゃないかなって思っているんです.

徳永　スキンシップとおっしゃった中で，みどり先生も聴くということを，質問項目を並べられて聞くいうことじゃなくて，その人を聴くという，看護の中で大きなことになってくるんだけど，聴けない，よう聴けないというような状況もあると思うんです.

谷川　はい.

徳永　こいつはどうしましょうね.

谷川　でも，俺そういう現場にいたことがないから，何か話が抽象的になるんだろうと思うんだけれども，あの，僕の詩の中に『みみをすます』という，わりと長めの詩があるんですよね．だから，聴くというよりも耳を澄ますと言った方がいいなと．ただ，それは相当理想主義的な考え方でね，実際に患者さんが何にもしゃべらなかったり，あるいは何か悪口言ったりなんかしているのに，耳を澄ますってどういうことになるのかという話になるでしょう．だから一番，愛の一番肝心な定義に入りたいんですよね.
それは僕の友達の岩田宏っていうのがね，あの，愛というのをどう考えるかといったときに，ただ一言，そばにいることと言っただけなんですよ．僕はそれがすごく深い定義だと思うのね，愛の．そばにいるということが大事で，そこで別にコミュニケーションが成立していなくても，あるいは治療とかそういうことがなくても，何かただとにかくそばにいると，存在するということがたぶん一番根本的にはいいんじゃないかなと思うんだけど.

川嶋　そのときね，先生.

谷川　はい.

川嶋　そばにいてほしくない人がいますよね.

谷川　うん.

川嶋　だから，そばにいてほしいと言ってもらえるような人になるにはどうしたらいいですか，これは学生たちには言うんですけれども.

谷川　それはもう具体的な人間関係だから，抽象的にこうこうと言えないじゃないですか．誰だって人の好き嫌いはあるし相性があるからね，そばにいてほしくなければそばにいないでくださいと言うしかないんじゃないの(笑)．時間がたっていくうちに何かこの人はやっぱりいいな，そばにいてほしいなって変化するかもしれないじゃん．どうでしょう.

徳永　そのへんは個別的だから．えっと，看護は「患者さんに寄り添って！」みたいに言うとうその言葉に聞こえる．それから「傾聴して！」「共感して，受容して！」と言う．何かとてもきれいだけどうそ言葉がいっぱい支配してるなあ，と思うんですよ.

谷川　そういう感じね．どこでもそうね．みんな意味を考えちゃうね，この人がここにいる意味は何だろう，私がこれをしてる意味は何だろう．意味というのは何か人間がさ，勝手につくり上げたものでしょう．存在というのは自然が生み出したもので，もう有史以来，存在はあるわけです．それを人間が何か哺乳類から少し進化して言葉を持っちゃったおかげで，意味が汚れちゃったわけでしょう．今の社会って，全部意味にすごいとらわれていると思うのね．だから，そういう意味を外せるような何か一種の自発性というのかな，生命力というのかしら，そういうものがつまり存在と存在の関係としてあり得るというふうに言えるんじゃないですかね.

徳永　すばらしいけど難しかったですね．もともと言葉がなかったんですって．で，言葉というものを作ってきて，そしてその言葉を極端に言うと，言葉というものが支配するというか，世界の先に言葉が来てしまってということですね.

谷川　先にというか何かね，言葉もないと人間社会はできなかったわけですよね．だから，人間と人間が動物とは違う社会をつくれたのは，やっぱり言葉というのが生まれたおかげだと思うんだけど，同時に言葉というのは人と人とを隔てるもんでもあったわけですよね．というか2つに割るのが好きじゃない，言葉は．愛と憎しみとかさ，何か消極と積極とかというふうに2分割をするのが好きでしょう．2分割できないもので相対立したものを一緒に言おうとするとすごく難しくなって，それを言うとだいたいお前は矛盾をしているよという，こういうふうに矛盾としてとらえられてしまう．だけど，世の中も

ほとんど現実は全部矛盾しているはずなんですね．むしろ矛盾していないものは何かいいかげんというか抽象的なものであって，現実の具体的なものはすべて矛盾しているというところから，存在というのは出発しているはずだと思うんですけど．

徳永　あの，時代が変わってですね，病院のロボット手術みたいな感じで，AI看護化もいよいよ進むんですよ．ロボット看護師もロボット介護士ももちろん出てきたりする．そういう時代の流れみたいなのに私なんかはどうしても違和感みたいなのがあって．でも，その前で症状を言ってくださいと言われて3つぐらい言うと，次の病気が考えられますと出てきて，ちょっと押すと治療にはこういうのがありますと，何か医者いらずみたいなことにも早々となり得る．私はそれで食えたけど，これから医者は食えなくなるかもしれないと思うぐらいAI化社会に向かうことを俊太郎さんはどう，とらえておられますか．

谷川　あの，俺はもう死ぬからさ，考えないんだよ(笑)．

徳永　とはいえ，この流れは俊太郎さんがつくったかと思うぐらい．

谷川　え，ちょっと何でだよ．

徳永　見通していたかと思うぐらい．『鉄腕アトム』から始まっていますのでね，「じゃんじゃんじゃじゃーん」って．

谷川　やっぱりAIが役に立つ局面というのは人間社会の中でいっぱいあるし，それも今後はもっとさらに広がって深まっていくであろうということは確かなんですよね．だけど，今おっしゃった医療とかの場面での医者の代わりにAIがというのは，ただ1つ肉体がないのでもう全否定しちゃいますね．医療ってやっぱり体がないとおかしいんですよ．だって，病気になっているのは体でしょう？

徳永　体というのは，あの，病気，病人さんの体と看護師の体……

谷川　そう．

徳永　両方の．

谷川　だから，体同士で向かい合わなければ医療とか介護とかってないはずなのに，それをAIが代用するんだったらそんな社会には生きていたくないっていう感じだね．

徳永　体という詩はなかったっけ．

谷川　ありました．

徳永　なかった？

谷川　持っていません．

徳永　あ，あ，あ，ちょっと待ってね．あの，えっと，そうこうするうちにその時間がきたので．

谷川　私よりたくさん詩集を持っていますね．

徳永　今からお出しするものの中で，看護師さんに読んであげたらいいかなというものを，この中からもしお許し願えれば．

谷川　徳永さんが編集してくださったと思って．『願い』．

いっしょにふるえて下さい
私が熱でふるえているとき
私の熱を数字に変えたりしないで
私の汗びっしょりの肌に
あなたのひんやりと乾いた肌を下さい

分かろうとしないで下さい
私がうわごとを言いつづけるとき
意味なんか探さないで
夜っぴて私のそばにいて下さい
たとえ私があなたを突きとばしても

私の痛みは私だけのもの
あなたにわけてあげることはできません
全世界が一本の鋭い錐でしかないとき
せめて目をつむり耐えて下さい
あなたも私の敵であるということに

あなたをまるごと私に下さい
頭だけではいやです心だけでも
あなたの背中に私を負って
手さぐりでさまよってほしいのです
よみのくにの泉のほとりを

(拍手)

谷川　ちょっと何かね，背中，背というのが出てきましたよね．

徳永　そう．うまい，見事．

谷川　うまく合ってますね．

徳永　よくここで背と手を出してくださいました．

谷川　いや，私の選択がまあ，ですね(笑)．

徳永　時間になったのでこれで終わりです．あ，もう1つ，そうそう，それで私がですね，あの，列車の中で作った，あの，『言葉遊び歌』がさっきできたんですよ．これを読みますので，そのジャッジをお願いします．『看護ってね』．

看護ってね　気遣い　息遣い　召使い
看護ってね　気遣い　息遣い　魔法使い
看護ってね　気遣い　息遣い　ちょうつがい

（拍手）

谷川　できるじゃないですか.
徳永　どう，これ.
谷川　禅の言葉でさ，何か，両手でこう手を打つとね，ぽんというでしょう．片手で打ったらどうかということがあるんですよね.
徳永　今は片手？
谷川　はい（笑）．だから深いですよ，意味は.
徳永　ええー↘，そうう↘↘
谷川　はい.
徳永　じゃあ，今日はこれで川嶋先生，終わります.
川嶋　どうもありがとうございました.

（拍手）